

はしがき

今年度、本誌『古典古代学』は第 11 号を迎えた。二巡目の始まりにあたる本号の刊行を機に、本誌を「古典古代学会」の機関誌として位置づけることにする。

紀要の類の価値が蔑まれることの多い昨今であるが、人文系にあって研究の進捗とは、究極的には研究者個人による、日々の絶えざる歩みに帰着するものであろう。その意味で、研究を公表する場に、基本的に価値の違いはあり得ない。発表のための言語に関しても、内容はさておき英語にすべきであるといった判断は浅薄に過ぎよう。

さて本号にも、筑波大学古典古代学研究室に関係する若き俊秀たちの研究成果を収めることができたのは、まことに慶賀すべきである。

第 1 論文は、本誌第 8 号、第 9 号、第 10 号に続き 4 度目の寄稿となる石田隆太氏と、あらたに学位を取得された高石憲明氏の共訳による、トマス・アキナスの原典訳である。高石氏に関して若干の紹介を行いたい。

高石氏は、中世哲学会の学会誌『中世思想研究』第 59 号（2017）に、「トマス・アキナスの真理への愛としての知恵」（63-78 頁）を發表された新進気鋭のトマス学者である。氏は、筑波大学大学院人文社会科学研究科・哲学思想専攻に、

「秩序付ける知恵 —トマス・アキナスの知恵概念研究—」

と題する学位論文を提出され、2019 年 3 月、博士（文学）の学位を取得された。

石田氏の活躍とともに、高石氏による今後の活躍を祈念する次第である。

第 2 論文の執筆者である菊地英里香氏は、創刊以来、休むことなく本誌に寄稿を続けるフランス近代思想研究者である。本来の専門であるジャン・ボダンではなく、本号にはセバスティアン・ミカエリスに関する論考を寄せてくれた。

引き続き、読者各位の心ある支援をお願いする次第である。

2019 年 3 月 25 日

筑波大学人文社会系 教授

秋山 学